

嗚呼、嗚呼、嗚呼

松下 勝章

「プレートの下にプレートが入り込んでグイグイ、ジワジワ押しているのです。だから、周期的に地震が起こる可能性があります」

その研修会の数日後、本当にその地震がやってきた。町々、村々が火と津波と放射能で覆われた悲惨が満ちた。

「神々の怒りだ」ある者が、そう言った。

「一つにならないから神々が怒っておられるんだ」と。「一つになろう、団結だ、一つに」「我々は強い国だ」「底力をみせよう」と掛け声があがる。

神は、無言で（そうじゃない、そうじゃない、違う、違う……）と言っておられる気がする。困りきって（そうじゃない、そうじゃない、違う……）と言っておられる気がする。

団結し、一つになり、神々に帰依しようとする民に、強さを誇ろうとする民に（そうじゃない、そうじゃない）と言っておられる気がする。

今も、この国のプレートの下に、プレートが入り込んでグイグイ、ジワジワ押している。

## 愛の糸

駒田 隆

「怒り」を辞書で引いてみましたら、「不満から腹を立て気が荒くなる意」(「日本語語感の辞典」)、とありました。

ということは、不満のない人間は、まず考えられませんか、誰でも怒りの種子を持っていることになりました。表面的にいかに取り繕っても、その心の奥深くにいつも不満を抱えているのです。

わたし自身のことを考えても、そのことがせつせつと身にしみてきます。若かった係長時代に、些細なことから、一週間も上司と口を聞かなかったこともあり、部下に心配をかけた思ひ出が残っています。

怒りは主に、と聖書にはありますが、簡単なことで難しいことです。信仰の弱いわたしの心は、不満の芽が飛び出そうとして、いつもほころんでいます。そのほころびを、信じるイエスは、愛の糸でそっと繕われました、この丈夫な糸は切れることはありません。この繕いで、わたしは救われているのです。

## 怒りから感謝へ

土屋 理絵

三月十一日、あの大地震の時、電車通学をしている息子は帰宅困難者となった。やっとな繋がつた電話口で、なんと歩いて帰ると言い張る。電車でも四十分余、しかも余震が続く中の夜間歩行など危険極まりない。学校に留まるのが一番安全だからといってようやく説得をした。

しかし翌日、帰宅した息子によると、ほとんどの保護者が自家用車やタクシー、バスを乗り継ぐなどして迎えに来たのだという。「うちだって来て欲しかったのに」その一言を聞いた瞬間、一晩張り詰めていた私の緊張感がプツリと音を立って切れ、一気に怒りが込み上げた。祈って待つしかない親の身がどんなものか。「親の心子知らず」も、甚だしい。「今まで可愛がって育ててきたのに」息子の前で声を荒らげ、情けなくて泣いた。こんなにぶつかったのは初めてのことであった。

しかし少し時が経ち、気持ちが悪く落ち着くと、時として親子の修羅場があることも、主に生かされているが故のことだと、「怒り」は「神への感謝」の気持ちに変えられていた。

## 怒りを鎮めるもの

島本 耀子

先年、完訳本の「レ・ミゼラブル」を読了して、小学生時代にダイジェスト版の「あ無情」を読んだ時とは少し違う想いを持った。

主人公ジャン・バルジャンは、パン屋の店先を壊し、一塊のパンを盗んだのがきっかけで、どん底の境涯へ落ちてしまう。

人は貧しさだけで悪事を働くものか。そのエネルギーの一つは怒りではないか。不幸と疎外感による怒りが、思考力を失わせてしまったのだ。怒りは人を凶暴にもさせる。ジャンは脱獄を重ねて、十九年間も獄に繋がれ、出獄後は凶悪な前科者扱いである。ミリエル司教に出会うまで彼を支えたのは、優れた体力と、本来のもの思う魂であった。

ミリエル司教はジャンに、暖かい食事と柔らかなベッドを与え、優しくもてなした。司教によって示された神の愛が、ジャンの心に巣食っていた、怒りの塊を溶かしたのである。怒りをマイナスのエネルギーとするなら、愛は、大いなるプラスのエネルギーとなる。

怒っても

須藤 あきこ

神の子とされ、クリスチャンとして生かされている日常の中で、赦し難いこと、耐え難いことに遭遇したとき、もしも、そのことに対して私が復讐しようとしたら、それは、私自身が罪を犯すことになる、みことばによって気付かされる。

「怒っても、罪を犯してはなりません。」（エペソ四章26節）と、みことばに迫られて、その人を赦し、忍耐し、主ご自身がその人に解らせてくださるときを待つよう、心を向けられる。

振り返って、あのととき復讐することなく、赦し、忍耐することができてよかったと、胸を撫で下ろし、平安が生まれる。

みことばによって赦しと忍耐を与えられ、神の愛のうちを歩ませていただいていることを感謝し、主にお会いするときまで変わることなく導いてくださり、弱さを与えられて歩む小さな者を、日々、お護りくださいますようにと、きょうも祈りつつ……。

## 親子

山本披露武

シラス干しを見詰めたまま、「これは親子やねえ」と義父がいう。が、その後がいけない。「子供はおつても親の面倒をみてる子は一人もおらん」というのである。「私たちがいるでしょう」と家内がいつても、「わしがいうのはやねえ、高知に来て面倒みてるもんがおらんということよ」と憎いことをいうのだ。そして、「ああ、情けない。死んだがましじゃ」とくり返しいうのである。

認知症だから仕方がないと思つてはいても、食事をしながらそのようなことを何度もいわれたのではたまらない。とうとう頭にきて、「あほう！ そんなに死にたかつたら食べんでよろしい」といつてしまった。

大変なことをいつてしまった。そう思つて、わたしは後悔をした。

がおどろいたことに、一分も経たない内に私がいつたことなどすっかり忘れ、「やっぱり高知のシラスはうまいのう」と、義父が笑顔でいうのである。

その一言で、わたしは救われたと思つた。そして、これからはもう怒るのはやめよう。そう思つたのであつた。

加藤家のLDK

加藤 透子

夫に怒られたことはただの一度だけ。

私の不注意で愛鳥にけがをさせてしまった時。

結婚指輪を無くしてしまった時も怒らなかった。

「指輪は物だから無くしてもいいよ」と言ってくれた。

朝寝坊した時も怒らなかった。黙ってごみを出してくれた。

日曜日には、ハーモニカを吹いて起こしてくれた。「起こすのも大変なんです」と言いながら。

力を入れた食事作りが続くと「もう作らなくていいよ」と言ってお休みをくれた。

お弁当を買ってきてくれることもあった。二種類のお弁当を半分ずつ分け合ってた。お弁当を買い損ねた時には、「冷蔵庫に魚があったでしょう」と夫が言って、一匹の魚を二人で分け合った。

「一切れのかわいたパンがあつて、平和であるのは、ごちそうと争いに満ちた家にまさる。」(箴言十七章1節)

神様、お怒りにならないで

遠藤 幸治

大津波によって、家屋や車が、そして人の命が次々に呑み込まれていくのを見た時、  
「神さま、お怒りにならないで……」

と祈るほかなかった。

美しかった東北の砂浜や街並が瓦礫となってしまった映像を見る度に、主イエスの十字架が重なってしまう。しかし、深刻な原発事故が収束に進まないなかにも、多くの人々の心が復興に向かって集結し、神の御心に近づけられている思いがする。

私の故郷、相馬の空も海も、また土地も放射能によって汚染され、避難を余儀なくされてしまい、住む人がいなくなってしまった。

だが聖書は言う。『破れを修復し、廢墟を復興して昔のように建て直す』（アモス九・11）。

故郷の灯台のあかりが再び燈る日を信じ、今はただアモスのように祈りたい。

『主なる神よ、やめてください』と。

泣くなといわれや／なおせき上げて／泣かずにおらりよか浜千鳥（江差追分後唄）



## 貴重な経験

長谷川和子

有料老人ホームを退職して二年。ふと最近「怒り」の、気持が殆どないことに気付いた。勤めていた頃は「忍」の一字。笑顔で入居者百数十名職員九十余名の対応に右往左往していた。

大概の入居者は職員の仕事を理解し好意的であったが、一部の方がホームや職員の態度が、意に添わないと不満となつて「県の福祉課へ」「老人ホーム協会」に訴えると、言い、その都度丁寧に対応するも精神的な限界の中で「教育の進歩がみられない」と、ある職員の態度を指摘し激怒された時は、微笑で受け応えする私の足底は、雲の上を漂っているような不安定さであった。

また、介護者の手に余る暴言や態度に私が出向き、対応後計った血圧の高さに仰天すること度々。

二十三年間、元旦は常にホームに。入居者との親睦。様々なことがあっても、肉親のような絆が生まれる。笑み顔で真摯に仕事を熱心に行っていた職員たち、今、穏やかな心で懐かしさに浸っている。

このいらだちはなんだろう

榎 尚子

あなたは怒らないのですかとよく人に言われた。何事も神様の御計画と教えられて大きくなつたし、まずは感謝という家庭に育つたので、いつの間にか穏やかないい人になつてしまつた。

今回の大震災は多くの人の人生観を変えた。あの日、私は職場に泊まつて小さい子と共に過ごし大変だと思つていたが、東北はそんなものではなかつた。何の病気もせずにあつけなく津波に飲まれた人の死をどう受け止めたらいいのか。仙台に一人暮らす高齢の叔母をめぐつて親戚中で相談している。

春休みに京都の親せきを訪ねた。京都は桜の名所だがつぼみはまだ堅く閉じていた。「今の時期どこのホテルも満員なんですよ。桜の開花を待つて一カ月ぐらいいるんです。国会議員の奥さんたちという話ですがね」

大震災があつても時が満ちれば花が咲く。被災者も見守る人もがんばっているのに、何かおかしい。私はいらだっている。

## 原子力発電所

有賀 麗子

二〇一一年三月一日の東日本大震災で、私の祖父の出身地である福島県の双葉町に原子力発電所があることを初めて知った。

私の中には以前から原子力発電は必要ないと考えていたが、今回のことで、日本国内に五四基も現存する事がわかり、驚きと同時に激しい怒りを覚えた。

自分の中の大事なものが根こそぎにされたような衝撃だった。  
新聞に、フィンランドで現在建設中の核燃料処分場は、十万元以上安全に管理する必要があると報道されていた。

十万年前はネアンデルタール人が暮らしていた時代だと読み、気が遠くなった。  
今、クリスチャンである自分は、何をすればよいのだろうか。

原子力発電を万能だと信じて人々に向かって、警鐘をうち鳴らしていく時が来ていることは確かだ。

## デマと怒り

北川 静江

根拠のない中傷、誤解、デマ、電話ストーリーカーなどに何十年も苦しめられてきた。ある年、法事で帰郷した時、Nさんに『同級生のMさんがご主人と食堂をやっている、夕食を食べに行こうよ』と誘われて行った。

店に入ると、旦那さんが私の顔をチラッと見るなり、夫婦で言い争って注文も取りに来ない。私に食べさせたくないらしい様子だった。

なぜ……

私の胸は激しく動悸した。帰りがかった。「私と関わると不幸が起きる」ということらしかった。やっときた食べ物、味気なかった。

その夜は悲しみと怒りで眠れず、「神さま助けてください」と祈り続けた。

朝、千葉の自宅へ帰った。

Nさんから電話で「Mさんの旦那が足を捻挫した。あなたが寄ったせいだと思ってるみたい」と言われた。

なぜ私が……。怒りを鎮めるのは難しかった。

## 入院体験で知ったこと

荒井 文

二〇一〇年の年末から年始にかけて入院し心臓のペースメーカー挿入の手術をしました。あと二、三日で退院というときでした。枕元に医療メーカーの社員三人が機具を持ち込んで検査を始めました。

数分後「なんだ、これは。再手術が必要だ」という声が聞こえました。私はドキドキし、激しいショックとともに非常に腹立たしくなりました。同時に、日野原重明先生の「医療に携わるすべての者は、死なない程度の入院体験が必要です」とのお言葉を思い出しました。そのとおりでと実感しました。

医師でなくても、患者の枕元に入りする人たちには病人への細心の心配りが必要だと思います。

聖書には『怒ることをやめ、憤りを捨てよ。腹を立てるな』とありますが、弱い私にはとてもできません。涙しながら悔いて祈りましたが怒りは増すばかりでした。病人の心理を理解してもらいたいと思いました。

その日アンテオケ教会を訪ねた人たちはエルサレムからの使いだという。パウロは、彼らの報告に唾然とし又心から怒りを感じた。

彼らは、異邦人の救いのためには、割礼が不可欠だと話した。パウロはパリサイ人として神に従うためには細々と律法を守らなければならなかったが、その中心が割礼であった。

だがそれでは心の平安が得られなかった。そのために彼はイエスをキリストとする集団を迫害したがそれも無駄だった。

しかしあのダマスコ途上での突然のイエスとの出会いは、文字通り彼を打ちのめした。彼は初めて神に祈り聖書を読んだ。イエスの十字架が既に預言されていることを知った。それは彼の罪を赦すためであること、何よりもイエスが今も生きていることを知った。それ以来彼はもうイエスの外は何も知らうとしなかった。

その後彼はバルナバと共にエルサレムに上って行った。

使徒たちは救いのために割礼は必要がないことを認めた。

## ふたつの器

西山 純子

自分の思い通りにことが進まない、すぐムカツと憤る人がいます。

思い通りにいかななくても、「ああ、そういう考え方もあったのか」と、ごく自然に視点を変えてみようとするとする人もいます。

どちらがベストとは言いません。

憤りの中には正義感があり、培って蓄えられた知恵もあり、その鋭い感性は否むものとは限りません。一見温かく賢く見える、憤りに陥らない人も、無責任につながる場合も見られます。

日々、出来るだけ平穏な心と態度でと願いますが、怒るべき時には躊躇うことなく怒りたいです。それは感情からではなく、真実に叛いた言動がまかり通る時に、静かに明確に反論できる豊かな憤りを示せる人間でありたいと願うことです。

怒る前に、相手の言葉を沈着に最後まで聞き、反論は祈りをもって言葉を選び、責めるのではなく、真実に導くことと信じます。

## 父母の部屋陥没

三浦喜代子

天災ではない。もちろんこのたびの東日本大震災でもない。

工事が始まった。我が家と背中合わせの猫の額ほどの敷地に四階建のビルが建つというのだ。以前は木造の平屋だった。父母の時代から長く近所づきあいをした老夫婦が亡くなって、それを機に息子家族は郊外へ移転した。跡地を地域の事業家が安値で買い、アパートにすると風のうわさに聞いていた。

地面が深く掘られると、水が滲みできて池のようになった。

ある日、奥の父母の部屋の床が歪んで沈み、池に向かって傾いていった。

この時ほど立腹したことはない。家中で火のように怒った。建築会社は形ばかりの修復はしたが事業家は頭一つ下げにこなかった。黙して、祈ることに決めた。

結局、二階の私の部屋の傾斜は直しきれず、以来、いつも机上の鉛筆が転がって落ちた。

あれから二十年。事業家はすでに他界し、怒りは主にあつて風化。思い出ぐさになった。



## 平和の祈り

志田 雅美

いつも優しい気持ちでいたい。でも、そうもいかない。日々、人の言葉やふるまいに苛立ち、心がささくれてしまう。そんな自分が嫌で、どれだけ神さまに祈っただろう。

神さま。つまらないことで腹を立てないように私を制してください。たとえ怒っても、人を傷つけることはありませんように。悪い言葉を口にすることはありませんように。怒りに囚われている限り、心に自由がないことを覚えさせてください。人を否むのではなく、受け入れることを。人を打ち負かすのではなく、自分を抑えることを選ばせてください。あなたに愛され、赦されているように、この私も人を愛し、赦せますように。

『平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる』

(マタイ五章9節)

神さまがそう言われるように、平和のために心を砕く私でありたい。だから、この祈りは生涯続く。天に召されるその日まで、ずっと。

## 怒りの根

富岡国広

彼は評判通り素行の良くない男であった。

私も彼に対して日頃から悪感情を持っていて、一度として心を許したことがない。

その彼が病気になるって入院したという。好意を寄せる同信の姉から、彼のために祈ってくださいといわれ、口にこそ出さなかったが内心「どうして？」との思いが当然のようにおこった。

「何であんな非常識な男のために？ 自業自得ではないのか」との不満や妬み、また、腹立たしさもあって、まるで、ニネベの町に遣わされた預言者ヨナのような思いになった。彼は、愛と恵みに富みたもう神の深い思いをまったく理解せず、ニネベの救いよりも、一夜にして生い茂り、一夜にして枯死したというごまの木を惜しんで、「私は生きているよ、死んだほうがましだ」と不満をあらわにした。

が、それは私が冒した怒りの根と同質の、冷酷な自己中心によるものだった。

それに対し、主はこう仰せられた。「あなたは当然のように怒るのか」と。

弱さをありがとう

土筆 文香

子どものころ、病気ばかりしていた。高校生になっても小児喘息が治らなかった。「弱く産んでごめんね」と母が言った。わたしは返事をしなかった。過保護に育てられたせいでこんなに弱くなったのだと怒っていた。

試験勉強をして少し寝る時間が遅くなっただけで熱を出した。自分が情けなく、怒りは自分にも向けられた。

あるとき、聖書の言葉『自分の弱さを誇ります。(Ⅱコリント十一章30節)』が心に留まった。なぜ弱さを誇れるのか不思議だった。

弱いから、自分の力では何もできないから、祈るしかなかった。何かできたとき、神様の力によってできたのだと思えた。神様はわたしが高慢にならないように弱さを与えて下さったのだ。弱さは恵みなのだ気がついた。

「弱く産んでくれてありがとう」とわたしは母に言った。そして神様に「弱く造って下さってありがとう」と言った。

怒りはあとかたもなく消えていた。

けんか

青葉亜樹子

私の『怒』の火種となるものの多くは夫にあります。

『夫婦のけんかは犬も喰わない』といわれ、箱を開ければ原因はささいな砂粒のようなものが多いです。

ところが、夫とけんかをして、確実に自分に非があるとわかりつつも「ごめんね」の一言がなかなか出せず、「ゴーマーナーネー！」と憎々しげに言ってしまう。

『いずれにせよ、あなたがたも、それぞれ、妻を自分のように愛しなさい。妻は夫を敬いなさい』（エペソ五章33節）の前ではたじろぎます。これは教会のこともさしていると聞きますが、目にも耳にも痛い言葉です。

私が教会を愛するように夫を愛し、夫も私を愛して黙って教会へ行かせてくれると、頭では分かっているのですが。

神様のお取り計らいと赦しと慈愛、祝福によっていつもの二人にもどれるのは不思議です。

『この神秘は偉大です』（エペソ五章32節）を思いめぐらしています。